

【論文】

符山堂蔵板広韻重刊をめくって

渡邊 大

広韻是一部保存中古音体系的韵书，在研究上古音上很有用。顾炎武认识到广韵的价值而重刊的便是符山堂本广韵。本文通过有关资料的调查，得到几条见解如下：符山堂本广韵有几种亚种；符山堂广韵的祖本是明内符本，买到祖本人不是顾炎武而是李因笃，入手的时期是康熙四年。

キーワード… 顧炎武、広韻、符山堂、音学五書、李因篤

はじめに

清朝考証学があげた成果のうち最もめざましい分野として、小学、わけても音韻研究を数えることにさして異論はおこらないであろう。そして、戴震が「答段若膺論韻¹⁾」の中で、「顧氏於古音有草創之功」と述べているように、音韻研究においても、その礎は顧炎武²⁾によって築かれたということもまた周知のことに属している。顧炎武の音韻研究の集大成である『音学五書』³⁾が開彫されたのは、康熙六年（一六六七）、顧炎武五十

五歳の時のことであり、これが所謂符山堂本『音学五書』であるが、その同じ年、やはり符山堂蔵板の『広韻』⁴⁾が上梓されている。顧炎武はこの『広韻』刊行にも深く関係していた。というよりも、顧炎武の古音研究における『広韻』の意味の重さが、その重刻に結びついたといったほうがより適切かもしれない。近年、顧炎武の上古音研究そのものや、その思想史上における意義などについて研究が積み重ねられており、当然、それらの中でも、この符山堂本『広韻』重刊のことは

取り上げられている。しかしながら、この符山堂『広韻』そのものについての検討はまだまだ十分なものであるとはいえない。これには、後述のように符山堂本『広韻』が善本ではなかったということが関連していると思われる。しかし、顧炎武の学術形成を考察しようとする場合には、本人が用いた版本に極力もとづくということがまず重要であり、『広韻』の場合、顧炎武自身がその重刻に深く関わっていたのであればなおさらのことである。そこで、本稿では、その前段階として、符山堂板『広韻』について、その系統やエディション、また、祖本の入手時期や出版の経緯などについて考えていきたいとおもつ。

一、顧炎武による『広韻』再発見と重刻

『広韻』は、直接には、北宋・陳彭年等の手になるが、その源は、隋・陸法言等の『切韻』にまで溯りうる、中古音の体系を存する韻書である。顧炎武の当時おこなわれていたのは平水韻（一百七韻）であり、二百六韻からなる『広韻』はすでに忘れさられた存在であった。顧炎武は、『詩経』の押韻例をもとに、その結

果を『広韻』に投影するという、その後の古音分部の基本的方法を打ち立てた。その結果得られたのが古音十部説であり、以後、上古音の分部はこれをもとに精密さを加えていくことになる。

埋もれていた『広韻』は、こうして、顧炎武によって再発見された。のみならず、重刻され、ふたたび世に出ることになった、それが符山堂本『広韻』である。頼惟勤は、顧炎武の『広韻』重刊について、「二百六韻の発掘は、考えうる最良の文献資料の探求という努力の成果です。『工ソノ事ヲ善クセント欲スレバ必ず先ツソノ器ヲ利ニス』とは誠に千古の鉄則です。しかも顧炎武は、その『利器』を公刊することによって、学界共有の道具としました」と評価している。また、なによりも顧炎武自身が「音学五書叙」において次のように述べているのが彼の上古音研究における『広韻』の役割の大きさをよく物語っている。

世日遠而傳日訛、此道之亡、蓋三千有餘歲矣、炎

武潛心有年、既得廣韻之書、乃始發悟於中。而旁通其說、於是據唐人以正宋人之失、據古經以正沈

氏唐人の失、而三代以上之音部分殊如至蹟而不可亂。乃列古今音之變而究其所以不同爲音論一卷、考正三代以上之音、注三百五篇爲詩本音十卷、注易爲易音三卷、辨沈氏部分之誤而一一以古音定之爲唐韻正二十卷、綜古音爲十部爲古音表二卷。自是而六經之文乃可讀、其他諸子之書離合有之而不甚遠也。天之未喪斯文、必聖人復起、舉今日之音而還之淳古者。子曰、吾自衛反魯然後樂正雅頌各得其所、實有望於後之作者焉。(古の聖人の時代から遠ざかるほどに、その伝えたところのものも誤りがひどくなっていく。この音韻という道においても、正しい音はほろびの一途をたどり、二千年あまりにもなるのである。私は、研究に没頭すること多年、やがて『広韻』を得ることでようやく悟るところがあった。そしてさらに音韻に関する説をひろく学び修め、唐人の音韻をもとに、宋人の誤りをただし、古經の音韻をよりどころにして沈約および唐人の誤りをただした。こうして〔夏・殷・周の〕三代の古音の部立ては秩序立ち一系乱れぬものとなつたのである。そこで古今の音

韻変化をひとつひとつ挙げてその異なる所以を明らかにし、「音論」三巻を作つた。三代以上の音を考究し、『詩經』三百五編に注して「詩本音」十巻を作り、『易』に注して「易音」十巻を作り、沈約の分部の誤りを弁じて一つ一つ古音によつてそれを訂正し「唐韻正」二十巻を作り、古音を総合して十部に分け、「古音表」二巻を作つた。これより、六經の文章はようやく読めるようになった。その他の諸子の書については合致するところはないところがあるものそうかけ離れているといつてもない。天が斯文を滅ぼさないのであればいつの日かきつと聖人が再び現れて今日の音韻を取り上げて淳朴であつた古の状態にかえすことである。孔子は『私が衛の国から魯の国へかえつてはじめて樂が正され雅頌はそれぞれよろしきを得た』とおっしゃっているが、この『音字五書』も、まさしく後世の制作者に望みをかけるものである)

顧炎武は、上古から中古を経て近世にいたるまでの歴史的音韻変化を、「あるべき姿」からの逸脱とみなし

ていた。このことは、『音学五書』のうち、もつとも中心となる「唐韻正」の名そのものが、顧炎武自身の古音十部説の立場から、唐韻（唐代の音韻）を修正しようという意図を示しているものであることから、確かめることができるだろう。『広韻』は、いわば正しからざる近世（の音韻体系）からあるべき上古へと遡るためのミッシングリンクであつたわけである。

しかし、この符山堂本『広韻』は、やがて、ふたたび顧みられなくなってしまう。それは符山堂本『広韻』が節略本であることが判明したからであり、また、よりよい版本が現れ、そちらが流通しはじめたからである。つまり、「顧炎武が大切にしていた広韻というものも、実は南山書院や勤徳書堂の亜流であつて、今日にして見れば蔵書家の話柄となつても学者の書齋には必要のない版ということになつてしまつたのである。王国維が、「顧刻広韻跋」において、「余於廣韻、有影宋本二、影元本一、又校得武原張氏所藏南宋刻小字本矣。顧復收此本者重其爲亭林先生所刊也（私は『広韻』については、影宋本をふたつ、影元本をひとつ所有しており、またさらに武原張氏所藏の南宋刻小字本を校

した。それなのにさらにこの本を蔵することにしたのはそれが顧亭林先生が刊行したものであることを重くみただからである）」といっているのも、まさにそのあたりの事情を映したものであるといえるだろう。今日、ふつうに『広韻』といえば、毛扆汲古閣藏宋本および潘耒鈔徐元文含經堂藏宋本に拠つた張士俊沢存堂本を指す。これは康熙四十三年（一七〇四）の開版で、この時、顧炎武はすでに世を去つている。

二、符山堂板『広韻』の系統

ところで符山堂本『広韻』が善本でないことには顧炎武自身も程なくして気がついた。これに関して、次に、『亭林文集』巻五所載の「書広韻後」を引用する。なお、この「書広韻後」は、後述の関西大学所藏符山堂本『広韻』の劈頭に「題広韻書後」としておさめられている文章と酷似しているものの互いに入出があり、総じて「書広韻後」のほうが詳しい。そこで引用にあつては、「書広韻後」を用い、「書広韻後」にみえ、「題広韻書後」にはみえない部分には傍線を付し、「題広韻書後」にみえ、「書広韻後」にはみえない部分は「

「を付しておく。また細かい文字の異同については注において触れる」ことにする。

余既表『廣韻』而重刻之、以見自宋以前所傳之韻如此。然惜其書之不完也。『路史』曰、「周有井伯、
『廣韻』曰、「子牙後」。今井下無此文。又曰、「廣韻」云、「漢有酈城後」。今酈字灰等二韻兩收而亦無此文。又引酈下云、「鄉名在右扶風」。而今灰韻注但「鄉名」二字。『困學記聞』曰、「廣韻」以賁爲姓、古有勇士賁育」。今賁下但「亦姓」二字。又曰「廣韻」云、「後蜀錄有法部尚書屯屯度」。又曰、「廣韻」引何氏姓苑有「況姓廬江人」。今屯下況下但「又姓」二字。『禮部韻略』引彼廣韻」字注云「論饒」子西 哉」。軻字注云「孟子居貧軻軻、故名軻、字子居」。今竝無此處。又注 字云「漢光武得此鼠、竇攸識之。廣韻以爲終軍、誤」。今亦無終軍之文也。太原傅山曰、「宋姚寬戰國策後序引『廣韻』七事。晉有大夫芬質、干者著書顯名、安陵丑、雍門中大夫藍諸、晉有亥唐、趙有大夫屨賈、齊威王時有左執法公旗蕃」。蓋注中凡言又姓者、必

以其人實之、而今書皆無其文。又史『通鑑釋文』所引『廣韻』其不載於今書者亦多也。「又此書本之『唐韻』而『容齋隨筆』引『唐韻』云「韓滅子孫分散江淮間。音以韓爲何字。隨音變遂爲何氏」。今『廣韻』又不載此文也」。十干皆引『爾雅』歲陽、而戊下不引著雍。又考之『玉海』言「廣韻」凡二萬六千一百九十四言、注一十九萬一千六百九十二字。今僅一萬五千九百二言、注一十五萬三千四百二十一字、則注之刪去者三萬八千二百七十一而正文亦少二百九十二言矣。又『文獻通考』曰、「有陸法言、攝孫訥言、孫愜三序。今止 序。又言「首載景德祥符敕牒」。今亦無之。則亦後人刪去之矣。其幸而存者天之未喪斯文也、嗚呼惜哉。

顧炎武は、当時目にするのできた資料中に見える『広韻』の引用が符山堂本にはみえないこと、『玉海』にみえる『広韻』の総字数に比して符山堂本の総字数が少ないこと、また、符山堂本には孫愜の序しかみえないことなどから、それが完本ではないということに気づいたのである。いま実際にたしかめてみると、沢

存堂本にはみえるそれらの文言が符山堂本にはみえない。¹³ 顧炎武が、結びに、「其幸而存者天之未喪斯文也、嗚呼惜哉（もし幸いにして「完本」『広韻』が）現存するのであれば、それは天がこの文化をまだ滅ぼそうとしていないということであろうに、まったく惜しいことである」というのは、いうまでもなく、『論語』子罕篇に、「子畏於匡。曰、文王既没、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何」とあるのを踏まえたものである。やや大げさにも思える措辞ではあるが、これが顧炎武自身の本心であることはいうまでもない。我々としては、ここから、顧炎武の上古音に対する姿勢と、符山堂本『広韻』が完本でないということを知ったときの落胆振りを読み取るべきであろう。また、節略本を重刻してしまつた、その不明を恥じて潘耒に書き送つた書信が『亭林餘集』「與潘次耕札其五」にみえている。

讀書不多、輕言著述、必誤後學。吾之跋廣韻是也。雖青主讀書四五十年、亦同此見。今廢之而別作一篇、並送覽以志吾過。平生所著、若此者往往多有、

凡在徐處舊作、可一字不存。自量精力未衰、或未遽死、遲遲自有定本也。（勉強がたりないのに、軽々しく発言したり、ものを書いたりすると、必ず後学をあやまらせる結果になるものだ。私が『広韻』にもした跋文がまさにそれだ。傅山のように長い問学問に励んでいる者も私と同じ見解であつた。そこで以前のものは反故にすることにし、あらたに別の一篇を作つたが、古いほうも一緒に君に送つてみてもらい、私の過ちを書きとめておくことにしよう。平生に著したものの中には、このたぐいのものが多からう、徐家においてある旧作はすべて一字のこらさず捨てさることにしようとおもつ。まだ力は衰えていないようだし、そんなにすぐに寿命がつきるともおもえないので、ゆつくりとでも完成稿をめざしていこうとおもっている。）

では、符山堂本はどのような系統の『広韻』なのであるうか。これに関して、沢存堂本『広韻』の巻前に置かれてゐる朱彝尊「重刊広韻序」¹⁴は次のように述べてい

る。

曩崑山顧處士炎武校廣韻、力欲復古刊之淮陰、第仍明內庫鏤板、緣古本箋注多寡不齊中涓取而刪之略均其字數、頗失作者之旨、(さきに崑山の処士顧炎武は『広韻』を校勘し、つとめて古に復そうとしてこれを淮陰で刊行したのだが、明の内庫本で、古本の箋注は字数の多寡が不揃いであつたものを中涓が削つて長さをほぼ揃えてしまつたものに拠つているために、かなり本来の姿を失つてしまつている)

潘耒もまた、同じく「重刊古本広韻序」において、そのあたりの事情を次のように記している。

先師顧亭林深明音學、憫學者泥今而昧古、實始表章此刻之淮上、然其所見乃內府刊本、已經刪削者、久而覺其書之不完作後序以志遺憾。(吾師顧亭林先生は、音韻の學を究め、學問に志すものが今に拘泥し、古の本当の姿には疎いのを憂えて、はじめ

て『広韻』という書物の価値を明らかにし、世に広めるため淮陰で刊行した。しかし、その拠つたところは、内府刊本のすでに刪節されてしまつてゐるものであつた。やがて先生はそれが完本ではないことをさとり、後序を作つて遺憾の気持ちを示された)

これらによれば、符山堂本の祖本は、明の内府刊本であるといふことになる。¹⁵⁾

『広韻』には、注解の詳しいもの、そうでないもの大きく分けてふたつの系統がある。略本は、さらに刪節の多いもの、少ないものの系統に分かれるが、符山堂本は、略本のうちでは刪節の少ないものに屬している。¹⁶⁾たとえば、「東」字の注解についてみると、沢存堂本は、二百二十九字¹⁷⁾あるのに対して、次に引くとおり、符山堂本は五十字しかない。

徳紅切、東方也、説文動也、又東風菜、吳都賦云
草則東風扶留、又姓、舜之後有東不訾、又漢複姓
東方朔、何氏姓苑有東萊氏、十七。

また、略本には、ただ注解を削っただけでなく、原本の文字をも誤ったものがあり、そこから略本間の系統を追うことができる。たとえば、符山堂本に「東方」や「舜之後」とあるのは、正しくは「春方」および「舜七友」である。今、内府刊本をみると、やはり誤ってそれぞれ「東方」「舜之後」に作っており、ここからも、明の内府刊本が、符山堂本の祖本であることが確かめられる。なお、顧広圻『思適齋集』巻十四「書元槩広韻後」は、顧広圻が手にした元刊本は、明内府本をさらにさかのぼる同一系統の祖本（つまり略本でも刪注が少ない系統のもの）であるという。それによれば、この元刊本は、内府本および符山堂本が「舜之後」と誤る部分を、正しく「舜七友」に作っており、顧広圻は、符山堂本の誤りは内府本に一致しているから、符山堂本の巻首「正字」の後ろに「悉依元本不敢添改一字」といつている「元本」とは「元來之本」の意味であり、顧炎武は元刊本を目睹していなかったことが分かる、と述べている。間接的ながら、ここから、内府本と符山堂本は（他のテキストを經由していない）

直接の親子関係にあるということが確かめられる。顧広圻がいう元槩とは、上掲王国維「顧刻広韻跋」に「此本出於明經廠本、經廠本又出於元圓沙書院本」とある「圓沙書院本」であるつか、今、『古逸叢書』所収覆元泰定圓沙書院本をみると、「東」の注解は、「東方」「舜七友」に作るほかは、符山堂本に一致している。このあたりの理由からであろう、顧広圻は、上掲朱彝尊「重刊広韻序」にある、略本の刪注が明の中涓によりはじまったという説は通らないと非難している。なお、邵懿辰撰・邵章統録『增訂四庫簡明目錄標注』（中華書局、一九五九年）には、「朱修伯曰、顧亭林據明内府本、更從他書增入數條、情張力臣繕寫刊行」と、朱学勤の説が引いてあり、符山堂本が内府本にことごとく一致しているかについては今のところ留保しておきたい。⁽²⁰⁾

三、符山堂本『広韻』のエディション

符山堂本が内府本の文字を改めているかという問題はひとまず置くこととして、次に符山堂本自身のエディションについてとりあげたい。小論にあたって目にするこのできた符山堂本は、次の三種である。本稿

における略称を掲げ、参考のため、所蔵機関による目録の該当箇所をあわせて引用する。なお、後述の吉川幸次郎博士旧蔵にかかる符山堂本（以下、吉川本と略称する）については、『吉川文庫漢籍目録』⁽²¹⁾などに著録されておらず、今のところその所在を突き止めるに至っていない。吉川本については、前掲倉石武四郎「清朝小学史話」と、清代経学の研究班「顧炎武『音論』⁽²²⁾ 訳注」の記述によって論を進めたい。

関西大本

一五四 廣韻五卷 宋陳彭年等奉敕撰 五冊

原題、「廣韻」。匡郭、二〇、三×十三、六、八行、

注文雙行二十四字。左右雙邊。白口。印記、「陵

川王氏藏書」。序跋、「題廣韻書後」、「陳州司馬

孫愐唐韻序」（天寶十載・七五一）、陳上年、「重

刻廣韻序」。四庫總目卷四十二。「其他」封面

「依宋板重刻 廣韻 符山堂藏板」

〔⁽²³⁾ 関西大学所蔵内藤文庫漢籍（古刊・古抄）目録、一九八六年）

京大本

廣韻五卷 宋陳彭年等奉敕撰 康熙六年 頴川陳氏刊本 五冊

〔⁽²⁴⁾ 京都大学人文科学研究所漢籍目録、一九八一年）

京産大本

廣韻五卷 宋陳彭年等奉敕撰 康熙六年 頴川陳氏刊本 一〇冊 一帙

〔⁽²⁵⁾ 京都産業大学図書館所蔵 小川環樹文庫漢籍目録、二〇〇二年）

三種を比較すると、版面の印象から、京大・京産大本のほうが後刷りのようであるが、本文の版式・行款は一致しており、同一の版木から刷られたものである⁽²³⁾と判断できる。ただし、題広韻書後、唐韻序、陳上年序、正字の各部分につき、違いがみられる。それらをまとめると以下のようになる。

まず、「題広韻書後」は、関西大本のみに附せられている。

続いて、唐韻序については、関西大本には、唐韻序の最後の「文字「也」が四葉裏一行目にとびだす形でみえており、さらに六行あけて最終行に「唐韻序」と

記されている。京大本には「也」字はみえるものの、最終行の「唐韻序」の三字はみえない。京産大本には「也」字「唐韻序」の三字ともみえない。

さらに、陳上年序については、九葉裏の最終行は、下に四字分の空格を残し、「……頴川陳上年序」で結ばれているのは三本に共通しているが、京大本、京産大本には、続く第十葉の一行目から二行目にかけて、「康熙六年歲干彊圍支協洽六月既望」とあるのに対して、関西大本はこの十葉目を脱している。また、京大本、京産大本には、陳序に続く一葉の一行目に、「正字」とあり、続いて四行に亘って「上谷陳上年祺公」「吳郡顧炎武寧人」「關中李因篤天生」⁽²⁵⁾「淮陰張 昭力臣」⁽²⁶⁾と四人の貫籍姓名を題した後さらに一行あけて七行目に「悉依元本不敢添改一字」と刻してあるが、関西大本はこの一葉も脱している。

他の二本に比して関西大本の異質性が際立っているのが目を引く。たとえば、京大本や京産大本には、「題広韻書後」はみられない。すでに引いた「顧刻広韻跋」において、王国維は、その家蔵にかかる符山堂本『広韻』について、「亭林後序比文集所載者殊略。蓋彼乃定

稿、此則初稿也（この符山堂本に附された顧炎武の後序は『顧亭林文集』所載のものに比べてかなり簡略なものである。思うに文集のほうが定稿であり、こちらは初稿なのである）」と述べている。ここにいう後序とは、関西大本の「題廣韻書後」であるに違いない。（両者の違いについてはすでに見たとおりであるが、たしかに、「題広韻書後」にみえて「書広韻後」にみえないのは、ただひとつ、『容齋隨筆』引『唐韻』の例であり、これは、嚴密には、『唐韻』についての引用であり、『広韻』の例でないことから削られたものと推測される。また、「題広韻書後」が「則此書之爲後人刪去者多矣」とあるのに対し、「書広韻後」が「則亦後人刪去之矣」と結んでいるのは、目睹しうる限りの資料は涉獵し尽くしたという語感がにじみ出ているように思えるのだが、これは穿ちすぎであろうか）。王国維は、これも「顧刻広韻跋」の中で、「別本卷首有校勘人姓名一葉。有陳上年・張昭・顧炎武・李因篤四人名。此本奪此一葉」とも述べており、この点についても、関西大本と一致していることを考えると、改装などにより、偶然に、正字の一葉が脱したり、「題廣韻書後」が付け加え

られたのではなく、符山堂本には「題広韻書後」(あるいは「書広韻後」)を冠し、かつ、正字の一葉を脱するものとそうでないものとのふたつのエディションがあると判断できるのである。⁽²⁷⁾ なお、京大本・京産大本に「康熙六年歲干彊圍支協洽六月既望」とある一葉が、関西大本には脱しているのも偶然ではなく顧炎武が清朝による紀年を嫌ったためであろうと推測される。⁽²⁸⁾ さらに、ここから推すと、京大本・京産大本と関西大本の違いは、いわば公のものと顧炎武が個人的に供するものという用途の違いによるものではないかと考えられるのである。⁽²⁹⁾

ここで吉川本についても触れたい。この本は、封面に「依宋板重刻」、「符山堂藏板」と題し、最初に孫愐の「唐韻序」を載せ、次に康熙六年陳上年の序、正字として陳上年・顧炎武・李因篤・張詔の四人の姓名籍貫の題しているという。「題広韻書後」は附されていないようであり、その点も含めてここまでは京大本・京産大本と共通しているのだが、この吉川幸次郎旧蔵『広韻』には、他の三本にはいずれもみえない「音論」が附されており、この点が特に注目される。

「音論」は、顧炎武『音学五書』の一篇である。現行本『音学五書』の「音論」が三巻、「古日音今日韻」・「韻書之始」・「唐宋韻譜異同」・「古人韻緩不煩改字」・「古詩無叶韻」・「四聲之始」・「古人四聲一貫」・「入爲閨聲」・「近代入聲之誤」・「六書轉注之解」・「先儒兩聲各義之說不盡然」・「反切之始」・「南北朝反語」・「反切之名」・「讀若」の十五条からなるのに対し、吉川本に附された「音論」は、「韻書之始」・「唐宋韻譜異同」の二条のみを含む一巻であり、字句についても現行本の「音学五書」所収「音論」との間に異同がみられる。この一巻本「音論」について、倉石武四郎は、「今の音論なり音学五書なりは後になつて企画を拡充したもので、最初はただ広韻を得たことを喜び、広韻の縁起を考えたものだけであつたのではないかと想像される」との見解を示すのに対し、「顧炎武『音論』訳注」は、「あるいはこの一巻本が原『音論』であつたかもしれない」と推測することもできるのだが、そうではなくて、『広韻』のためにことに関係の深い部分を抜粋して作られたものだ、という可能性も排除しがたい」とする。ことの当否はさておき、⁽³⁰⁾ 符山堂『広韻』には、一巻本

「音論」を附すか否かという点においてもエディションが存在するということは確かである。⁽³¹⁾

四、内府本の入手時期について

符山堂本に附された陳上年序は、実は顧炎武による代作であるという指摘が、これも再三取り上げた王国維「顧刻広韻跋」にみえている。たしかに、この序は、「音学五書序」、「音論」、「韻書之初」、「唐宋韻譜異同」、「答李子德書」と重なる部分が多く、顧炎武の手になることは間違いない。その陳序には、符山堂本の親本となる内府本の入手について、次のように記されている。

顧徵君炎武……所著有『音論』『詩本音』『易音』『唐韻正』『古音表』、諸書皆所以正唐韻之失者而以唐正宋、則主『廣韻』。向過鴈門數爲余言之、又出其所攜善本相與繙閱、惜此書存者無幾、即顧本不得借留。同學關中李處士因篤偶見之京師舊肆、遂購以歸。予乃割奉若干屬淮上張文學弼重付劖劂公諸海內焉。(顧炎武……の著書には、『音論』『詩本音』『易音』『唐韻正』『古音表』があるが、これ

らはいずれも唐代の韻を正すためのものであり、唐によつて宋を正すのものにはもつぱら『広韻』によつた。彼は、鴈門を訪れると度々私にそのように言つては携えている善本を取り出し、ともに繙き閲するのであつた。残念なことにこの本には現存するものがほとんどなく、かといつて顧氏のものも借り置くことができない。たまたま同学の李因篤が京師の古書店でこれを発見して購つてきたので、自分は費用を負担し、張弼に重刻のことを依頼し、海内に公布することにした)

これによれば、顧炎武は自身ですでに『広韻』の善本を所蔵していたということになるが、この話は疑わしい。勿論その可能性を完全に否定することはできないのだが、すでにみた「與潘次耕札其五」の内容や、「題広韻書後」が書かれたり、後になつて改定されたりという事情を考えると、顧炎武はもともと『広韻』を所蔵していたわけではなく、実際に『広韻』を目にしたから、あまり間をおかずに重刻にかかったものと考えられるのである。これについては、『広韻』発見の

喜びと、陳上年になりかわつての執筆という虚構の中におけるさまざまな心理とがないまぜになつた結果の潤筆とみるべきであらう。

一方、符山堂本『広韻』が、李因篤が京師で購つてきた本に由来することは、王弘撰『山志』二集巻四「韻」にも、李子徳嘗得廣韻舊本、顧亭林言之陳祺公託張力臣爲鏤木准陰。此唐人所用之韻也」と記されており、顧炎武と親交のあつた王弘撰の言であるから、こちらは確實であるとしてよいであらう。

ところで、陳上年は『干禄字書』も重刊しており、その「重刻干禄字書序」が、今、朱振祖鈔『別本干禄字書』にみえる³²。それによれば、陳上年が刻した『干禄字書』は、もと顧炎武の蔵書であり、李因篤がそれを出版するよつに陳上年に勧め、陳上年が張弼に重刻を依頼したものであるという。つまりこの『干禄字書』も符山堂蔵板ということになるのだが、そこには『広韻』のことも触れられていて、「寧人與天生亟稱廣韻、廣韻分部雖不盡衷於經、然頗爲近古。字画亦端楷可觀、以簡秩稍多、未能即刻、故先刻干禄書（顧寧人と李天生はしばしば『広韻』を稱揚する。『広韻』の分

部は、すべてが經書に合致しているというわけではないが、それでも古音に頗る近い。そちらのほうは字画も整つておりすばらしいものであるが、分量が多いためすぐに重刻するというわけにはいかないため、まず『干禄字書』を重刊することになつた」とある。この序の末尾には「康熙五年秋八月既望」と記されており、この時点ではまだ『広韻』重刻のための準備が整つていなかったということが窺える。すでに触れたように、符山堂本『広韻』重刊がなつたのは、その十ヶ月後の、康熙六年六月であつた。ここからは、李因篤が『広韻』を購入したのは康熙五年から遡ること幾許もない時期であらうと想像されるのである。

吳懷清『関中三季年譜』巻六「天生先生年譜」によれば、康熙五年以前で、李因篤が京師を訪れたのは康熙四年のみである。この歳、李因篤は朝見のため上京する陳上年に同道して都に足を運んでいる³³。また、その翌年の康熙五年六月、顧炎武は代州の陳上年の衙門に李因篤を訪ねている。『干禄字書』および『広韻』重刻の時期とあわせて考えれば、李因篤が『広韻』を入手したのは康熙四年のことであつたと判断すべきであ

るう。李因篤が顧炎武と知遇を得たのは康熙二年であった。⁽³⁴⁾時に李因篤は三十三歳、陳上年の幕下にあつたが、これ以後、二人の親交がはじまった。『音学五書』には時折、李因篤の説がみえており、彼との交流が顧炎武の音学形成に一定の影響を与えたと考えられるのであるが、『広韻』重刊においてもまた李因篤の果たした役割はまた大きかつたのである。

むすびにかえて

以上より、符山堂本『広韻』には、いくつかのエディションが存在すること、また、その直接の祖本となる内府本は李因篤が京師に赴いた康熙四年に購入されたものであることなどが明らかになった。エディションの存在については、それが顧炎武の清朝に対する姿勢から生まれたものであるということが注意されるし、また、『広韻』の入手時期については、顧炎武の上古音説の形成に関連して重要である。そこで、次には、その『広韻』が顧炎武の『音学五書』や『日知録』などに実際どのようにみえているのか考察していくことが必要となる。そのことを確認して本稿のむすびにかえ

たい。

注

(1) 『戴東原集』巻四。

(2) 一六一三―一六八二年。崑山の人。名は終、当初、字を忠清といつたが、明朝滅亡後、名を顧炎武、字を寧人と改め、時に蒋山傭の変名を用いた。亭林はその号。

(3) 張穆『顧亭林先生年譜』、周可真『顧炎武年譜』(蘇州大學出版社、一九九八年)等参照。なお、『音学五書』には、崇禎癸未(一六四三年)の年号を記す石倉居士曹学侖の序が附せられていることから、その成立につき議論がある。顧炎武の古音研究の淵源を何時頃に求めるのは難しい問題であるが、『音学五書』は『広韻』の発見を期に完成に近づいたといふことはできる。後掲注(32)参照。

(4) 例えば、次のようなものがある。頼惟勤「顧炎武の『詩本音』について(一)〜(四)」、『御茶の水女子大学人文科学紀要』第二十一巻第三号・第二十一巻一号・第二十三巻一号・第二十四巻一号、一九六八〜一九七一年)、岡本勲「清朝古音学の成立 顧炎武・江永について」(『中京大學文学部紀要』第二十六巻一号、一九九一年)、濱口富士雄「清代考拋学の思想史的研究」(『国書刊行会』、一九九四

- 年、もと「清代考拠字の形成契機 顧炎武『音学五書』から見た」、『秋田大学教育学部研究紀要』(人文・社会)第三十二号、一九八二年)、井上進「漢学の成立」(『東方学報』第六十一号、一九八九年)、木下鉄矢「清朝考証学とその時代 清代の思想」(創文社、一九六六年、もと「古音学の歴史 学的認識の形成及び深化の過程」、中国思想史研究『創刊号』、一九七七年)、白田真佐子「顧炎武『唐韻正』における入声韻分割と『広韻』」(『愛知大学文学論叢』百二十八輯、二〇〇三年)
- (5) 頼惟勤『説文入門』(大修館書店、一九八三年)
- (6) 倉石武四郎「清朝小学史話」(『漢学会雑誌』第十卷第三号、一九四二年十二月)
- (7) 王国維『觀堂別集』卷三。
- (8) 「後」関西大本作「侯」。
- (9) 「只」関西大本作「止」。
- (10) 「攸」関西大本作「攸」。
- (11) 「芋」関西大本作「羊」。
- (12) 「則亦後人刪去之矣」関西大本作「則此書之爲後人刪去者多矣」。
- (13) ただ、符山堂本去声五「眞」韻には、「彼」を誤って「彼」に作ったうえで、「彼、哀也。『論語』子西彼哉」と

あるのだが、文字面が異なるため顧炎武はこれには気がつかなかつたのだろう。なお、「彼」は上声「紙」韻にも所収されており、こちらは、符山堂本が「邪也」、沢存堂本が「埤蒼云彼邪也」に、それぞれ作っている。また、細かく比較すれば諸資料に引かれた「広韻」と沢存本とが完全に一致しているわけではない。引用の「雅門中大夫藍譜」は、沢存堂本は「中山大夫藍譜」に作る。このことは、全祖望『鮚埼亭集』外編卷三十五「題重刊宋本廣韻後」に、「顧亭林之購廣韻也。但得明人笈本而是本末之見。既離而惜其不完也。歴引前人書所載而爲明笈本所無者志於後。今以是本攷之則亭林所引者皆在焉。惟姚寛國策後序引廣韻藍字下雅門中大夫藍譜今本失去雅門二字又作中山大夫」と指摘されている。

- (14) また『曝書亭集』卷三十四にも所収。
- (15) 明内府本については、明・劉若愚『内板經書紀略』に「廣韻二本 二百」とある。また、民国・陶湘撰『明代内府經廠本書目』一卷ありとのことだが未見。
- (16) 節略の多いものは、さらに「舜之後」から「東萊氏」までの二十二字を略して、二十八字しかないという。朴現圭・朴貞玉『広韻版本考』(学海出版社、一九八六年)参照。なお、朴書に「舜七後」とあるのは単なる誤植である

う。

(17) 沢存堂本の東字注解は次のとおり。

春方也、説文曰動也、従日在木中、亦東風菜、廣州記
 云陸地生莖赤和肉作羹味如酪香似蘭、吳都賦云草則東
 風扶留、又姓、舜七友有東不訾、又漢複姓十三氏、左
 傳魯卿東門襄仲後因氏焉、齊有大夫東郭偃、又有東宮
 得臣、晉有東關嬖五、神仙傳有廣陵人東陵聖母適杜氏、
 齊景公時有隱居東陵者乃以為氏、世本宋大夫東郷為買
 執、英賢譜云今高密有東郷姓、宋有員外郎東陽无疑撰
 齊諧記七卷、昔有東閭子富貴後乞於道云吾為相六年
 未薦一土夏禹之後、東樓公封於杞後以為氏、莊子東野
 稷、漢有平原東方朔、曹瞞傳有南陽太守東里昆、何氏
 姓苑有東 氏、德紅切、十七。

(18) 内府本は、據明内府原刻本小学彙函本による。

(19) 同様の批判は、『四庫全書總目提要』にもみえている。

(20) しかし、見通しからいえば、内府本における明らかでない
 刻などの訂正のほか、顧炎武が他の資料にみえる『広韻』
 の引用を符山堂本に加えたという可能性は少ないと思つ。
 それは、『日知録』などにみえる彼の原典主義から考えての
 ことである。また、たとえば、符山堂『広韻』にも、上聲
 卷三冒頭の欄外に、「李因篤曰卷中十八吻十九隱各自為部

不相連屬而其下各註云獨用此目錄乃云同用誤」とあり、そ
 こにはむやみにテキストを改変しないという姿勢が現れて
 いる。

(21) 『吉川文庫漢籍目錄』(神戸市立図書館編集・発行、一九
 八五年)

(22) 『東方学報』(京都) 第五十一冊(京都大学人文科学研
 究所、一九七九年)

(23) なお補訂などの有無については未調査であり、今後の課
 題としたい。

(24) 陳上年、字は祺公。清苑(河北省)の人。順治六年の進
 士。

(25) 李因篤(一六三一〜一六九二)。富平(陝西省)の人。
 字は子徳、また天生。

(26) 張昭(一六二五〜一六九四)。淮安山陽(江蘇省淮安市)
 の人。字は力臣。

(27) なお謝啓昆『小学考』卷三十には顧氏炎武重刊広韻五卷
 が存として著録されており、「顧炎武書廣韻後曰……」と
 して載せられている文章は、『亭林文集』のものとはほぼ一
 致している。『小学考』は、原書に附せられた序跋を転載
 するという朱彝尊『經義考』の体例に倣ったものであるか
 ら、謝啓昆は改訂版の「書広韻後」が附されている符山堂

本『広韻』を目睹していた可能性もある。とすれば、符山堂本『広韻』には、初稿の「題廣韻書後」を附したものと定稿の「書広韻後」を附したものが存在するということになる。また、前掲「與潘次耕札其五」からは、顧炎武は『広韻』重刻にあたって、当初、「題廣韻書後」（あるいは「書廣韻後」）とは別の跋をものしていたことが分かる。とすればこれを附す符山堂本『広韻』が存在した可能性もないことはない。

(28) このことは、たとえば、顧炎武自身の編次にもとづく『顧亭林詩集』の紀年が、歳星と干支によって表記されていることなどからも首肯しうるであろう。顧炎武の紀年についての見解は、『日知録』卷二十一「古人不以甲子名歳」にみえている。なお、王国維の手にした符山堂本にこの一葉が脱していたのかどうかは、「顧刻広韻跋」には触れられていない。また、この点に関連しては、避諱にも注意しなければならぬ。いま気づいた限りでは三種とも陳序において「魏左校令李登」と作るべきところを、「魏左較令李登」に作っている。「校」は、熹宗・朱由校の諱を避けたものであると思われる。さらに全面的に調査する必要がある。待考。

(29) 「與施愚山」(『亭林文集』卷三)、「與人書其三」(『蔣山

備殘稿』卷二)、「與人書其二」(『亭林佚文輯補』)などに、顧炎武が友人などにあてた書簡のうちいくつかは『広韻』を送るという記事がみえる。

(30) この問題については、『音字五書』の成立、延いては顧炎武の上古音研究の形成と絡む問題であり、稿を改めて論じたいが、現時点における見通しから結論のみを記せば、一巻本「音論」が三巻本「音論」からの抜粋である可能性は低いとおもう。

(31) さらに、このほか、『漢学師承記』卷一「閻若璩」条には、江藩が顧千里から聞いた話として、顧炎武が刊行した初印本『広韻』の「校刊姓氏」には、「受業閻若璩」とその名が連ねてあった、とある。この点について、張穆『閻潜邱先生年譜』は、符山堂版『広韻』の刊行が康熙六年であるのに対し、顧炎武と閻若璩が相識したのは康熙十一年であることから、その可能性を否定し、符山堂『広韻』に、四人の姓名を記した後に一行の空白があるために、このような話をでっち上げたのであろうとのべている。

(32) なお、この序には、「若夫述三代之遺、復風騷之正、則有寧人『音統』在、將次第公諸海内焉」という文言がみえている。「與湯聖弘」(『蔣山備殘稿』卷三)に、「拙著『音統』已改名『音學五書』、以鬻産之資、付力臣兄刻之淮上、

尚需改定、故未印出」とあることから、『音学五書』の名称が『音統』から変更されたのは、「重刻千禄字書序」が書かれた康熙五年秋八月以降であったということが分かる。

(33) 上掲「天生先生年譜」の関係箇所原文は次のとおり。

康熙四年乙巳三十五歳

春從陳祺公展觀取道大同、經易州・涿水・涿州・良郷、

抵都叩謁十三陵。出都經保定返代。

康熙五年丙午三十六歳

春自代返過太原與秀水朱錫鬯彝尊定交。春抵里遊青門。

五月番禺屈翁山大均至長安因定交。翁山偕至富平、登

堂拜母。六月偕赴代。時顧寧人至訪先生於道署。

またこのことについては上掲「顧亭林先生年譜」康熙五

年の条にも「訪李予德於代州牧陳祺公上年署」とある。

(34) 「康熙二年……在代州崑山顧寧人炎武遊五臺、經代州遂

訂交」。なお、張穆「顧亭林先生年譜」には、「康熙二年……

至代州游五臺與富平李氏因德遇遂訂交」とあるが、ふた

りがはじめて出会ったのは代州であろう。

〔付記〕 小論は二〇〇四年度文教大学文学部共同研究「清朝

考証学の成立に関する研究」による成果の一端である。